

# 亞細亞觀

金福鐵道沿線の考古學的價值

石永

盤

龍

山

潮

海

寺

(1)

魏

子

窩

紅

嘴

堡

城

五

西

城

子

屯

の

古

墳

六

駱

午

節

風

俗

四

駝

駝

石

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

駝

## 金福鐵道沿線の考古學的價值

三 宅俊成

前百三十四回に金福鐵道沿線の史蹟地を紹介したが、其れ等の史蹟の多くは考古學的に考察するに價値を有するものが尠くはない。今其の代表的なものに就いて簡単なる解説をしやう。

『一、先史時代の遺蹟』金福鐵道沿線には至る處に貝塚、遺物包含層、積石塚等の先史時代の遺蹟が多いが、其の主なるものは蠶廠屯驛北の石切山の遺物包含層、亮甲店驛北の有名なドルメン及び倭寇で名高い望海塙城附近の遺物包含層並に石塚、清水河驛北東、量家嘴子の貝塚、魏子窩驛附近の東嘴子、老龍島の遺物包含層、夾心子驛南西の天后宮及び東老灘や火神廟三塚子等の貝塚等は研究するに足る遺蹟である。これ等の遺蹟の中、三塚子、火神廟の遺蹟は昭和二年東亞考古學會で大々的に發掘され、世界にその遺蹟が紹介された。完全なる彩色土器、酈形土器人骨等の發見は特筆すべきであらう。

『二、有史時代の遺蹟』有史時代の遺蹟としては城址、烽火台、寺廟等がある。

(1) 城址 金福沿線の數多くの城址中代表的なものは登沙河驛の西南二里餘正明寺會大嶺屯の北東の丘上に在る大嶺屯城にして是れは筆者が昭和七年十月發見した漢代の故城址で、城址より多數の漢代の銅器、鐵器、古錢、土器等を發掘し、確証を擧げ學界に一新説を提供した。即ち從來旅順の牧羊城が漢代の沓氏縣に擬定されて來たのであるが、これに對して新發見の大嶺屯城址は一段と有力なる漢代の沓氏縣治の候補地となつた。

(拙著大嶺屯城址參照)次に清水河驛の北東黃家檀子に在る城址も又筆者の發掘により古錢、銅器、土器類が出土し、これも亦漢代を降らぬ故城址なることを明にした。

次に年代は降るが、我々日本人として、是非知らねばならない故城址に、亮甲店驛の東的一里の山上にある望海塙城がある。望海塙城は岩間德七先生の金頂山真武廟の倭寇に關する古碑の發見により、倭寇に關する故城址なる事が立証せられた。望海塙城に關して前記岩間先生の外、杉本吉五郎先生や島田好先生等の研究發表があるが、尙一層考古學的に倭寇の遺蹟を研究する要があらう。序に倭寇の望海塙襲撃に關して畧記すれば、永樂十七年六月十五日、倭寇の大軍が二、三十艘の船に分乗し登沙河を溯船し上陸して、望海塙城を襲ふたが、明の守將劉江の計に陥り、倭寇は某の歸路を絶たれ、櫻桃園の空堡に逃れたが、再び包圍されて、遂に全滅の悲運に遇つた。斯くして此の戰ひは午前八時に始り、午後六時に終りを告げた。諸書により相違するが、明吏劉榮傳には倭寇の斬首千餘級生擒百三十とある。併しこの望海塙の戰の記錄は明の方による外はないのであるから、果して其の通りであつたかは斷言が出來ない。

倭寇の全滅した櫻桃園空堡の所在地は、未だ發見されてゐないから、此の調査が必要であらう。

### 駱石の傳說

駱石は杏樹屯驛の西南、約二十數町の海岸に在り。長さ約六十四米、最高約十二米の巨岩で土民は昔は其の状が駱駝に似て、其の頭が山東の方に向いてゐた。云ひ次に如き傳説が語られてゐる。昔山東地方の農作物が年々荒ざり、遂に神に同ひを立てて、海の海岸にある駱駝石が、夜毎に神通力で山東東州杏樹屯に來て、農作物を食ひ荒すため山東は疲弊し、其の反対に駱駝石を打ち碎けば其の害がなくなるとの託宣があったので、駱駝石を打ち碎かせた。それで現存の駱駝石には頭がなくなつたと云ふ。

(亞細亞大觀十二輯五)



## 説傳の石駄駒

存き願のるのに樹り。に民在  
のひ託か反來屯、昔向は昔。駱駝石は  
駱駝はがに、海に東ては其さ約杏樹  
石石るあ駱駝農岸神地みに方たの約杏樹  
にのくつ駱駝駝作にに伺のと狀六樹屯  
は頭を渕のを糞をろひ農云が十屯駱四驛  
が錫海で打で食駱を作ひ駱米の  
な杖のち、ひ駝立物次駝米の西南、  
くで海山碎關荒石てがのに似最高  
な打を東け東すがる年如似きて、約約  
つち渡のば州たゝこ、荒傳說其二十  
た碎り農其がめ夜、海されがの頭米數町  
さか、民の肥山毎海大語巨岩で土  
云せ密は害えは神越變られ山東の海岸に  
ふたに高がては神越通え關東州がゐる方土  
。杏德な行疲通々、巨岩で土  
そ樹のくくなので、山東杏困る方土  
れ屯道し、山東杏困る方土  
でへ士とある其東杏困る方土  
現赴にるある其東杏困る方土

(亞細亞大觀十二輯五回)

、永樂十七年六月十五日、倭寇の大軍が二、三十艘の船に分乗し登沙河を溯船し上陸して、望海嶋城を襲ふたが、明の守將劉江の計に陥り、倭寇は某の歸路を絶たれ、櫻桃園の空堡に逃れたが、再び包圍されて、遂に全滅の悲運に遇つた。斯くして此の戰ひは午前八時より始り、午後六時に終りを告げた。諸書により相違するが、明史劉榮傳には倭寇の斬首千餘級生擣百三十とある。併しこの望海嶋の戰の記錄は明の方による外はないのであるから、果して其の通りであつたかは斷言が出來ない。

## 伏見宮殿下御宿所

伏見宮殿下御宿所は、明治三十七年五月八日此の地の南方海岸、沙嶺子港小河口に激浪の間を御徒涉御上陸遊ばされたことを永遠に記念する爲めに、御上陸最初の御宿泊の地に昭和八年碑を建て、伏見宮殿下御上陸記念碑と題す。書は武藤元師である。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十二輯五回)

## 伏見宮殿下御宿所

本碑は金福鐵道簡易驛宮之宿に在り、征露第二軍の第一師團長陸軍中將伏見宮貞愛親王殿方が金枝玉葉の御身を以て、明治三十七年五月八日此の地の南方海岸、沙嶺子港小河口に激浪の間を御徒涉御上陸遊ばされたことを永遠に記念する爲めに、御上陸最初の御宿泊の地に昭和八年碑を建て、伏見宮殿下御上陸記念碑と題す。書は武藤元師である。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十二輯五回)





## 伏見宮殿御宿所

本碑は金福鐵道簡易驛宮之宿に在り、征露第二軍の第一師團長陸軍中將伏見宮貞愛親王殿下が金枝玉葉の御身を以て、明治三十七年五月八日此の地の南方海岸、沙嶺子港小河口に激浪の間を御徒涉御上陸遊ばされたことを永遠に記念する爲めに、御上陸最初の御宿泊の地に昭和八年碑を建て、伏見宮殿下御上陸記念碑と題す。書は武藤元帥である。

（印畫の複製を禁ず）

碑記陸上御下殿宮見伏

尚御爾彼宣に氣に自積簾に朝に屋にあ大一  
寫座等其内去數此あが六番見宮殿下が  
現御上陸最初の御宿泊所は林家屯會  
殿下が金枝玉葉の御身を以て、明治三十七年  
五月八日此の地の南方海岸、沙嶺子港小河口  
に激浪の間を御徒涉御上陸遊ばされたことを  
永遠に記念する爲めに、御上陸最初の御宿  
泊の地に昭和八年碑を建て、伏見宮殿下御上  
陸記念碑と題す。書は武藤元帥である。

（印畫の複製を禁ず）

（亞細亞大觀十二輯五回）

（亞細亞大觀十二輯五回）

### 端午節風俗

本寫眞は金福沿線杏樹屯驛の南、征露第二軍の上陸地の一である小河口の部落で撮影したものである。滿洲では舊五月五日端午節の時、民家では各々門口に桃の枝に布製の猴子を懸す風がある。猴子は邪を拂ふ力があるものとされ、又猴子の両手にさげた小帶は病氣を掃除する云ふ寓意を持つものである。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十二輯五回)





## 城堡嘴紅窩子貔

本城は貉子窩宋家屯會西城子屯にあり、  
城一門子、紅水城、東西一米。南に甕城を造り、  
門がある。盛京通志卷二十九に「紅嘴堡」。  
城(金州)東北一百二十里。周圍二里。一百八  
步。門一。今我太祖(清)高皇帝。辛酉年。此  
撫降之。門に設汎焉とあれば、既に明代此  
地に築造せしこと明かである。尙城内蓋しかの征  
城門にかげたものであらう。

(亞細亞大觀十二輯五回)

俗風節

且家では各門口に木の柱に布製の猿子を懸す風がある。猿子は邪を拂ふ力があるものとされ、又猴子の両手にさげた小簎は病氣を除余する云ふ寓意を持つものである。

(一) 寺海潮山龍盤

大鐵安佛龕  
置を子潮  
中富管内  
有數の名刹  
ある。本殿に釋迦  
最著。故額  
最鉢。道光  
四十四年の  
碑文中に「海  
於天地間爲  
最古。同寺香  
爐ある。又境  
内に雍正十  
一年の銘を有する。  
事とも考へられ  
る。如くは或  
此の近まで海  
入爲り。海潮寺  
は魏子高驛北里餘  
賛子河會に在り。  
大鐵安佛龕  
置を子潮  
中富管内  
有數の名刹  
ある。本殿に釋迦  
最著。故額  
最鉢。道光  
四十四年の  
碑文中に「海  
於天地間爲  
最古。同寺香  
爐ある。又境  
内に雍正十  
一年の銘を有する。  
事とも考へられ  
る。如くは或  
此の近まで海  
入爲り。海潮寺  
は魏子高驛北里餘  
賛子河會に在り。  
(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十二輯五)

西城子屯古墳

も明明後築副の幅深せ年  
の代での造葬で打れ〇され  
とのは研方品あちて、一  
思墓ある究法を發見する  
は碑は道に及び見る  
れのが待有する  
る存す此も紋  
る古墳の紋様  
處が出来てあつ  
る。是頗るながつたが、夫に一枚  
の西方數町で推定し  
ての特殊築造の處に年代の  
多くは多數で墓等の二で米米  
の不今のものも個覆  
(印畫の複製を禁す)

(亞細亞大觀十二輯五)





## (一) 寺海潮山龍盤

潮海寺は貔子窩驛北里餘、贊子河會に在り。子窩管内の有數の名刹である。本殿に釋迦安置を中心として、右に龍王、左に天后聖母を安置してあり。前に雍正十一年の銘を有する大鐵磬がある。又境内的の中央に民國八年八月の大鐵磬がある。同寺は道光十四年の碑文中に「海於天地間。爲物最鉅。故瀕海者。多以名寺。而潮海寺爲最著。」とある如くは或は昔此の近くまで海入り込みし事とも考へられる。

(亞細亞大觀十二輯五)

(印畫の複製を禁ず)

# 西城子屯の古墳

も明明後築副のものは幅深せ年宋家  
の代での造葬で打れ○さら月屯會西  
と思は研究法をあちたあ四、一、た降雨  
は碑あるに及發見。棺米の爲め、城子屯の南數町の畠の中に在り。  
れのが待び見。盜が。の地が陷沒した結果、  
る。存す此も紋がある様出事あ口一上八  
る處古墳よりの推定方數町の處造  
よりの印畫定し複製を禁す) は來があつたが、  
は從頗なるがつたが、夫妻に何處で  
は築造のものが、蓋し夫婦には二枚  
は特殊のものも、墳墓等の二個要  
ら多數はで墓等の二個要

石

石佛寺は贊子河會に在り、本殿に釋迦及石  
佛東殿に藥王、西殿に天后を祀る。石佛寺の  
名は嘉慶年間重修の際、山崖より石佛を得て  
之を祀る故なりと云ふ。石佛寺天后宮碑に七

輯五回)

## 潮海寺

(二) 潮海寺の門外の西側の松林中に、九聖祠、  
鏡樓、古碑等がある。九聖祠には雍正十三年  
の鐵磬があり、廟前に半ば埋れたる古碑は磨  
滅して全く判讀するこ事が出来ない。併し年  
號を書く處に大明らかく見ゆる字がある。果  
して然るか。此の地松風を聞き清遊に適して  
ゐる。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十二輯五回)



寺 海

滅して全く判讀するこゝが出来ない。併し年號を書く處に大明らしく見ゆる字がある。果して然るか。此の地松風を聞き清遊に適してゐる。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十一輯十)



## 石佛寺

石佛寺は贊子河會に在り、本殿に釋迦及石佛東殿に藥王、西殿に天后を祀る。石佛寺の名は嘉慶年間重修の際、山崖より石佛を得て之を祀る故なりと云ふ。石佛寺天后宮碑に此の記あり。「石佛寺金邑盤龍山朝海寺之下院建於有明。前清嘉慶時重修。斯廟興工之日得石佛於山崖。因以名焉。即今佛所供之石像是也。」境内に嘉慶年間等の古碑がある。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀十二輯五回)

## 永安臺

在魏子宮驛の北方二里、贊子河會新台子屯に石築の外郭の中には南北二十八米、東西二十六米の圓筒形の外郭の中に、四十粍の基部に積み上げたもので、十粍の煉瓦を以て造りし望見所は唐高宗時代に萬曆年號を刻せるものと云ふるも、皆俗説で戰代の築造なるこゝに疑ひの餘りある。此の烽火台か路の要をなしたものであるが、元石額に明に万曆の年號を刻せるものと云ふるも、皆俗説で戰代の築造なるこゝに疑ひの餘りある。

(亞細亞大觀十二輯五)



